

【ポスター発表】

在宅高齢者に対する訪問看護・訪問介護・居宅介護支援の
チーム活動に関する研究(3)

- 他職種連携についての考え方との関連 -

京都女子大学 原田由美子 (6076)

松井 妙子 (香川大学・3306) 綾部 貴子 (梅花女子大学・3308) 井上千津子 (京都女子大学・2013)

鳥海直美 (四天王寺大学・4400) 白澤政和 (桜美林大学大学院・769)

キーワード：チーム活動・連携についての考え方・実践度

1. 研究目的

介護保険制度の柱の一つに在宅ケアが挙げられ、要介護状態になっても住み慣れた地域で質の高い生活を継続することを目指している。在宅において介護を行ううえで、チーム活動が重要である。そこで、本研究では、在宅ケアを推進するために欠かせない、訪問看護、訪問介護、介護支援専門員のチーム活動において、他職種連携についての考え方との関連を明らかにする。

2. 研究の視点および方法

調査対象は、K圏内で wamnet に登録されており、無作為で抽出された訪問看護事業所の看護職、訪問介護事業所のサービス提供責任者、居宅介護支援事業所の介護支援専門員の各 500 名 (計 1,500 名) である。調査方法は、無記名自記式質問紙を郵送した。調査期間は 2010 年 10 月 5 日～10 月 31 日である。1500 の配票に対し 788 票を回収した。そのうち未記入が多い 6 票を除外し、782 票 (有効回収率 52.1%) を分析の対象とした。調査項目は、調査対象者の「基本属性」12 項目、「他職種連携についての考え方」に関する質問項目は、「訪問看護・訪問介護・居宅介護支援の三職種 (以下、三職種という) に上下関係がある」「三職種と問題を共有できる」「他職種との交流がお互いの専門的技術の向上に役立つ」「連携のための知識や技術を高めたい」「介護報酬の加算がつくと連携が促進される」「チームメンバーとの連絡調整は、介護報酬に算定されないが専門職の業務に含まれる」の 6 項目とし、「ほとんど思わない、あまりそう思わない、どちらとも言えない、ややそう思う、非常にそう思う」の 5 段階尺度とした。分析方法は、「他職種連携に対する考え方」の各項目の平均値以上を高群、平均値未満を低群にわけ、この 2 群を独立変数とし、プロマックス回転にともなう主因子法により抽出された「チーム活動に対する実践度」の 3 因子を従属変数とする t 検定を行った。

3. 倫理的配慮

倫理的配慮として、京都女子大学臨床研究倫理審査委員会の承認を得て行った。対象者には、研究の趣旨や匿名性の確保について文書で説明し、回答は、調査の目的や活用方法に同意する場合に回答するよう求めた。

4. 研究結果

「他職種連携についての考え方」の単純集計の結果の全体の平均値は、3.93であった。各項目の平均値に関して、「連携のための知識や技術を高めたい」が最も高く4.56、次に「他職種との交流がお互いの専門的技術の向上に役立つ」が4.38、「チームメンバーとの連絡調整は、介護報酬に算定されないが専門職の業務に含まれる」が4.03、「三職種と問題を共有できる」が3.97、「介護報酬の加算がつくと連携が促進される」が3.65、「三職種に上下関係がある」が2.99であった。これらの数値から、専門職として、知識や技術の向上に努めること、介護報酬に算定されなくても、専門職として連絡調整は、業務に含まれると考える専門職が多い傾向があることがわかった。

「他職種連携に対する考え方」と「チーム活動に対する実践度」の各因子とのt検定の結果、「三職種に上下関係がある」について、第1因子「チーム活動の具体的方法」(p<.05)と、第2因子「チームケアの質向上のための行動」(p<.01)、第3因子「チームケアの基盤」(P<.001)と有意差がみられ、三職種に上下関係の意識が低い、つまり対等であるとする群は、チーム活動の実践度が高い傾向にあることが示された。「三職種と問題を共有できる」では、全因子と有意差がみられた(p<.001)。「他職種との交流がお互いの専門的技術の向上に役立つ」も全因子と有意差がみられた(p<.001)。「連携のための知識や技術を高めたい」は、全因子と有意差がみられた(p<.001)。「チームメンバーとの連絡調整は、介護報酬に算定されないが専門職の業務に含まれる」も全因子と有意差がみられた(p<.001)。「介護報酬の加算がつくと連携が促進される」の項目については、第2因子「チームケアの質向上のための行動」のみ、有意差がみられた(p<.1)。このことは、「チームメンバーとの連絡調整は、介護報酬に算定されないが専門職の業務に含まれる」において、全因子と有意差があったことから、連携は専門職として当然行うべき職務であり、介護報酬の加算がなければ実践度が低くなるということではないことがわかった。

表 「他職種との連携に対する考え方」との関連

基本属性項目		第1因子 チーム活動の具体的方法					第2因子 チームケアの質向上のための行動					第3因子 チームケアのための基盤				
		平均値	SD	有意確率	T値	自由度	平均値	SD	有意確率	T値	自由度	平均値	SD	有意確率	T値	自由度
三職種に上下関係がある	高	3.78	0.62	*	2.31	752	3.59	0.71	***	2.89	748	3.95	0.64	***	5.21	763
	低	3.67	0.69				3.44	0.73				3.69	0.73			
三職種と問題を共有できる	低	3.48	0.72	***	-5.88	767	3.24	0.82	***	-5.83	762	3.51	0.85	***	-6.99	777
	高	3.81	0.61				3.60	0.67				3.93	0.62			
他職種との交流はお互いの専門的技術の向上に役立つ	低	3.56	0.63	***	-7.12	767	3.36	0.72	***	-5.97	762	3.67	0.72	***	-6.24	777
	高	3.89	0.64				3.67	0.70				3.98	0.65			
連携のための知識や技術を高めたい	低	3.51	0.68	***	-7.59	767	3.27	0.744	***	-7.18	762	3.62	0.772	***	-6.50	777
	高	3.86	0.599				3.66	0.676				3.95	0.627			
介護報酬の加算がつくと連携が促進される	低	3.70	0.68				3.43	0.76	**	-3.00	761	3.80	0.74	ns.	-1.22	776
	高	3.76	0.62	ns.	-1.38	766	3.59	0.69	**			3.86	0.67	ns.		
チームメンバーと連絡調整は、介護報酬に算定されないが専門職の業務に含まれる	低	3.63	0.67	***	-5.32	767	3.42	0.73	***	-4.62	762	3.73	0.72	***	-4.84	777
	高	3.88	0.59				3.66	0.70				3.98	0.65			

***: p<.001 **: p<.01 *: p<.05

なお、本研究は、平成21年度大阪ガスグループ福祉財団「研究・調査助成」を受けて実施した研究成果(代表：松井妙子)の一部である。